第 68 話＜皿糸＞の要約と参考資料

第 68 話＜皿糸＞の要約

全身をヒ素に蝕まれ、50 歳で亡くなった亜ヒ焼き労働者の妻は「まこつ、金が仇の人生じゃの」と悔やみました。賃金が高いゆえに危険な労働について、傷つき病んで命を奪われた人たちが、世界の綿産業を支えていたことを、どれだけの人が知っていたのでしょうか。

第 68 話＜皿糸＞の参考資料

６８－１　高千穂町岩戸皿糸

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P89

大声で呼べば向かいの山に聞こゆるほど狭い皿糸の谷に、5，6 軒の農家がひとかたまりになっておる。土呂久を引き払うたミサさんは、皿糸部落のはずれに藁葺の粗末な小屋を建てた。尾平越の林道より一段低い所じゃ。そのずっと下に、くねくね曲った土呂久川が見おろせた。鉱山からたち昇る煙は、ここまで昇ってはこざった。

皿糸の空気はすがすがしかった。この空気を腹いっぱい吸うて、ミサさん一家は生き返った心地がした。病んだ身には、転地療養が最高の治療法に思えた。じゃがそんとき長女のイセノさんの病気は、元へ戻らんほど悪化しておった。健一坊と同じように皮膚病と咳に苦しんだイセノさんは、岩戸尋常小学校を卒業した大正 15 年の春に死んだ。遺体は皿糸の佐保家の墓地に、おとっさんの徳四郎さんの脇に埋けられた。石ころを並べただけの簡単な墓じゃ。

土地さえあって身体さえよけりゃ、百姓は渡世にゃ骨折らん。じゃがミサさんは、婿どんの徳四郎さんが二番子だったがために、全然土地を持たん。そのうえ鉱山から病気を持ち帰ったとあっては、渡世は骨折りばっかしたい。部落（むら）ん衆（し）の仕事に雇われ、食べもんを分けちもろて生活した。どこそこ破れた着物を着て、亜砒に負けて傷だらけの顔をゆがめて咳込む姿な、見るも哀れじゃった。

亜ヒ焼きの政市つぁん一家が、ミサさんたちを追うように、鉱山から皿糸へ移ってきた。皿糸は政市つぁんの継親（ままおや）の竹治さんの故郷でよ。博奕好きの竹治さんは、借金の抵当（かた）に家と土地をとられてしもとる。政市つぁんは鉱山で稼いだ金で、これを買い戻して住むことにした。まあまあ大きな百姓家じゃった。鉱山を離れてしばらくたって、鉱山長の川田がぶらりと訪ねちきた。

「おまえがやめたあと、亜砒を焼く者がどうしても見つからん。頼むから、鉱山に戻ってもらえんじゃろか」

以前にも一度、亜砒焼きから足を洗おうとした政市つぁんを、川田と喜右衛門さんがひき止めたことがあった。それは大正 12 年、政市つぁんが肺炎で倒れたときんこつ。人

のいい政市つぁんは今度もまた、川田の頼みを断りきれんかった。皿糸から土呂久鉱山通いを始める。それも長うは続かざった。仕事場で、政市つぁんが血を吐いて倒れた。もうそんときな、亜砒に食われた身体はボロボロじゃった。

６８－２　風呂焚き（佐保）ミサさんの一家　　（５４－３と重複）

生熊来吉「砒素の烙印」（「怨民の復権Ⅱ」）P124～126 より

佐保さんの家は、鉱山住宅のなかでも一軒だけとびはなれて亜砒焼窯の近くにあった。（略）そのころ、土呂久川の左岸、944 メートルの峰をもつ懸崖の麓に築かれた数基の亜砒焼窯から、休む間もなく毒煙が吐き出されていた。鉱山跡を見た人ならば、急斜面の灌木林にある山神さんの小さな祠を思い出すであろう。その真下のズリのうえに、佐保さんの家と共同風呂があった。そこは亜砒焼窯からわずかに 50 間しか離れていなかった。

茅葺きといっても、茅を 10 センチほどの厚さにして並べただけの粗末な屋根だった。激しい風雨に耐えられるはずがなかった。他の住宅は畳敷きであったが、ここだけは床板に茅のむしろ。土壁のかわりに、竹の横木に藁の壁。窯から家に向って吹きつける風に乗って、藁壁の隙間から煙が侵入してきた。6 畳 1 間の家のあがりがまちに囲炉裏が切ってある。鉱山の枯れ枝を燃やすと亜砒の粉が舞い、臭い煙が立ち昇っていた。仁市さんの表現によると、その煙は「鼻がもげるような」においを発していた。大きな木をくりぬいた飲料用の水溜めに、亜砒焼の灰が容赦なく降って、山から引いた水はたちまち黄色く濁ってしまった。

同 P121~122

こんなことがあってから、敏安さんは山口市の国立湯田病院でリハビリテーションを始めた。田川診療所でも半身不随、運動機能・歩行障害などが認められた。手の痺れがあり、右手の痛覚が鈍っている。

「頭が悪うしてやれん」と云うが、池田先生は脳血栓と診断した。

呼吸器障害のため気管が弱っており、咳と痰が激しく、軽い喘鳴が聞こえる。

遠出のときには、手足の角化を摘み取るためにペンチを持って歩く。昭和 22 年 3 月田川時代に足の角化のために入院したら、三井の医者から先天性慢性湿疹だからタチが悪いと云われた。体一面の色素沈着と脱失は兄弟 3 人共通である。池田先生が懐中電灯で口のなかを見せてくれた。左内側の粘膜に黒い斑点がべっとりとはりついていた。手の平にも鶏眼と称する角化があった。

６８－３　亜ヒ焼き労働者だった鶴野政市さん

川原一之「死につぶれ」（「辺境の石文」所収）P85-86

クミは亜砒焼きが始まったとき、夫の政市とともに「樋の口」の名子（なご）として働いていた。「樋の口」の畑を耕して、収穫の半分を受けとる「分け作」である。義父の借金を返

すためなのだが、収穫の半分をとりあげられたのでは、いつ返済できるかわからなかった。解放されるメドはなく、塞がれた日々を送る二人の目の前で、亜砒酸鉱山が始まった。「分け作」より鉱山で働く方が、はるかに収入はよい。鉱山仕事でいちばん金になるのは、最も危険な亜砒焼きだった。それは、自らの生命と健康を銭に替える職種であった。二人は鉱山から亜砒焼きを請負い、稼いだ金を借金の返済に当てた。何重にも抵当にはいった義父の土地と家を買戻すため、三度もまとまった金を送った、という。一九二七（昭和二）年、借金を払い終えてやっとの思いで亜砒酸鉱山に別れを告げたとき、政市の肉体は亜砒酸に蝕まれてボロボロになっていた。この二人に亜砒焼き夫になるようすすめたのが佐藤喜右衛門だった、という。

川原一之著「土呂久羅漢」

亜砒焼きの煙にあたると、汗のかきやすい鼻の脇、首、股、腋の下に、粟粒みたいなブチブチがいっぱいでけた。ブチブチの頭が膿をもち、痒いもんじゃき掻くと、破れたとこから汁がでる。「亜砒負け」というて、痛して痒して、なかなか治りきらん。手のひらと足の裏の皮が厚うなってきて、気色の悪いことに、固いイボイボがいっぺんに飛びだした。イボイボだらけの手のひらは、顔を洗うときに、ごとごと触って痛かった。足の裏のイボイボも石を踏みつくると、とびあがるほどに痛かった。風呂あがりには二人して、柔くなったイボイボを剃刀で削ることやった。「体の中にはいった亜砒が、手と足から出よるっちゃろか」と言いながら……

鶴野クミさんの話（1981 年 11 月 24 日聴取）

朝は時間がこんうち（8 時前）から、鉱石をじょうれん箱で 2 度くらい引きよった。鉱石だし。働かな食われんたい。時間が来たら、だんごづくり。時間が終わると、鉱石割り。政市さんと私たちゃ、請けでしよったけ。よだんなことせんと、お金残らんとよ。当たり前では。借銭払わにゃ、残りがでけん。（夢は）畑やら山やら買うて、百姓しよう、ということ。亜ヒをつくって銭もろたけど、他の仕事なら、そげな毒はねえわな。誰が憎いちねえが、自分で亜ヒ焼きをしたんが悪かったとよ。鉱山行かんでもよかったのに、お金が欲しいばっかりに。まこつ、金が仇敵じゃな。金でじゃ、なんでん難儀するわの。

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P237-238

土呂久鉱山で最初の亜砒焼き夫になった政市つぁんは、（昭和）二十三年二月二十七日に枯れ木が枯れるようにして死んでいった。手足に無数のコブ、しわがれ声、気管支をやられて横寝がでけん。片肺はつまらん。心臓は弱い。慢性の胃腸炎に失明寸前の目。砒素中毒の見本のごつ全身の病気もちで、最後は性根もねえなって五十歳の生涯を終えた。金とりがいいばっかしに危険な労働に従事して、命まで売ってしもた人たち。金が仇の人生じゃの。

川原一之著「土呂久羅漢」P41 より

政市さんの遺体は、皿糸の墓原(はかわら)に埋(い)けた。それから二十何年もたって、どうか骨を掘りおこして調べてくださいち、お願いすることになろうとは、思いもせざった。あれは、公害が問題になったあとの昭和四十七年一月。「わたしの父は亜砒にやられて死んだ。死体を掘りあげて、亜砒が原因だとはっきりさせてくだされ」。秀男が頭をさげて、環境庁の役人に頼んだったい。県が「土呂久に公害はない」と発表した明くる日、環境庁の調査団が土呂久に視察に来たときのこつ。（略）ところが環境庁も宮崎県も、秀男の頼みごとに貸す耳はもたざった。いまだに政市さんの死骸は調査されんずく。